
Training Box

日奈久 夕花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Training Box

【Nコード】

N0356Z

【作者名】

日奈久 夕花子

【あらすじ】

ファンタジー&恋愛の掌編小説並びに短編小説置き場。ブログにて掲載した作品をこちらに整理しました。お題内は基本同一世界。ただしつながりはある場合とない場合がございます。リハビリとしての習作作品となりますので、ご了承くださいませ。15日まで毎日更新予定。(サイト名:「確かに恋だった」様 <http://have-a-chew.jp/> よりお題をお借りしております)

1. 賭博好きのお姫さま

フィンオルディアの第二王女は、それはそれは美しい。

いまだ成人前ゆえに、結うことの無いその髪は日に透けて輝き、ほっそりとした面にいたずらな目が若草の色に輝いている。

フィンオルディアの第二王女は、それはそれは愛されている。

王と王妃はもちろんのこと、側妃たちの評判も悪くなく、兄弟仲も悪くない。

むしろ、両親たる王と王妃と、側妃と子である兄弟たちには溺愛されているといってもいい。

幸せで素晴らしい、フィンオルディアの第二王女。

だけど。

だけどひとつだけ。

彼女は秘密を持っている。

この国の、王女の最大の秘密。

「この前の試合の結果は、どうなりました?」

傍らに控える無二の侍女に、王女の柔らかな声がかかる。

「ええ、下馬評通り……と申したいところですが、大番狂わせができましたわ」

「まあ！ では、今度も、わたくしの勝ちね」

手に持った扇で口元を隠しながら、ころころと鈴を転がすような声で笑う王女。

「……さすがですわ。姫様」

うつとりと微笑む、侍女の姿。

フィノルディアの第二王女は、とても美しく愛されている。

けれど、両親も皆も、誰も知らない秘密。

彼女の個人資産が、実は途方もないものになっている、ということ。

——彼女が、とても賭博好きだ、ということ。

彼女の特技は変装で、時折城下に降りては少々いかがわしい場所で、賭け事を繰り返している、とか。

その付近ではさり気に姉御と呼ばれている、とか。

誰もだあれも、知らない秘密。

「……さあ、この国での最後で最大の賭けが、もうすぐはじまるわ」
成人の日まであと少し。

間もなく決定する嫁ぎ先を思って、扇の陰でニヤリとどこか妖艶な
笑みをこぼす姫なのだった。

f i n

2. 元騎士様、求職中

品行方正にして質実剛健、誠実なるものであれ。

そんなものくそつくらえ、とばかりに投げ出して、自由に生きてやるぜ！ と、騎士をやめたのはもうどのくらい前になることか。

「……若かった、なー」

断られた店先、深くため息を漏らしながら、男は項垂れた。

最初はよかった。それなりに蓄えもあったし、自由になった身が嬉しいばかりで。

飲んで遊んで、その日暮らしの日々。

軽いけがで、まあ、そりゃ、頑張れば前の通りに働けないこともなかっただろうが、これ幸いと騎士をやめて。

心配する両親には、大丈夫です、またやり直します、なんて、いい顔みせて。

しかし、時間がたつにつれて、両親は渋い顔に。

ためた金使い果たしたあたりから、仕事もしないで遊び歩く男に、周囲は厳しくなってきた。

世の中、金、かー？ 権力かー？

貧乏子爵家に、男を遊び惚けさせる余裕はなかったようだ。

「あー……仕事おちてねえかなあ」

いっそ傭兵にでも思ったが、けがのあと真面目に鍛錬しなかったために変な癖がついてしまった。

ならば力仕事か、と、思ったが、怠けた体は重くすぐに息が切れる。

若かったなあ、と、しみじみ空をみあげてつぶやいて。

のそのそと、宿へと戻る。

実家を追い出されて、日雇いの仕事で乗り切って。

……このまま、うらぶれて、俺は昔騎士だったんだぜー、なんて、よっぱらってつぶやくようになるんだろうか。

それがあまりにありありと想像できて、男はぶるりと身震いをするのだった。

f i n

3. 王子様はノイローゼ

「……僕はなぜここにいるんだろう」

王城の豪華な執務室で、書類を片手に、一人の少年がぼんやりと窓の外を眺めながら呟いた。

少年は身なりから、身分が高いことが察せられる。それもそのはず、この国の王太子として若干15歳ながらも執務の一部を担っていた。

「ああ、鳥だ……空を飛べたら自由になれるかなあ……あはははは」

しかし、覇気がない。茫洋と窓の外を眺め、まるで棒読みでつぶやく。

「……執務中ですよ」

傍らに控えていた侍従が、遠慮がちに声をかける。が、聞こえないのか振り向きもしない。

「ああ……遠くにいきたいなあ。海の方こうの新大陸にでもいきたい。もう、もういいじゃないか、もうさ、やりたいっていうなら、ぜーんぶ、譲るからさ、もう、ほっといってくれよってね」

無表情のまま、窓の外を眺めつつ、つぶやき続ける少年。

と。

がしゃーんと窓が割れて、黒ずくめの装束の男が飛び込んでいた。

「お命頂戴仕る！」

「殿下！」

そのまま襲い掛かる男に、侍従が王子を守るように飛び出し、控えていた騎士たちも臨戦態勢となる。

きん！ と、男の攻撃がはじかれ、緊迫した空気の中、騎士と男が切り結ぶ。

「あ……」

ぽつり、と。そんな中王子が声を漏らす。

「あああああもう！ そんなに俺が王太子やってんのいやなんだ
ったら、やめてやる！ やめてやるよちきしょー！！」

ばん！！ と、机をひっくり返しそうな勢いで、王子が叫ぶ。

「で、殿下、何を！！」

「だってそうだろうよ！ ロクに仕事を手伝うわけでもないのに王
になりたいとかいいながら俺を狙ってくる弟どもも、ロクに政治の
あれこれもなんもわからん上に浪費だけは激しい弟どもの母親ども
も、もうもう、勝手にしろってんだ！ 好きに勝手にやればいい、
俺はもう知らん。もうもう、もう知らん！ 父上が大変だからと手
伝ってはいたが、その父上だって馬鹿な子ほどかわいいんだかなん
だかしらんが弟どもをかばいやがるし、そのうえその馬鹿な母親た

ちも、惚れてんだかなんだかしらんが放置しやがる。この国、ぎりぎりだぞ？ 経済状態ぎりぎりなんだぞ？ それをおっまえ、仕事もしねーで金ばっか使っておいて、王位継承の儀が近いからってこまでざかざか暗殺者やら毒やら仕込まれたんじゃ、俺やってられねえって！ 国のため、民のためって思っただこまでやってきたけど、もう限界。もう無理。もう勘弁。生まれた時から命狙われてたけど、10超えてからは仕事手伝いながら頑張ってきたけど、もう、限界。俺、出てく。絶対この国でってやる！」

一気にそれだけ告げると、机の上の書類をなぎ倒し、部屋から出ていく。

「っ、で、殿下ああ?!」

足音高くその場を去る王子の姿に、室内は一瞬茫然としたが、あわてて騎士の一部と侍従が後を追う。

残されたのは騎士と相対していた暗殺者のみ。

気まずい沈黙が続く。

そつと視線を逸らした暗殺者は、静かに剣を引くと、頭をかいた。

「まあ、なんだ……うん、なんか悪かったな」

なんとも言い難い暗殺者の男の言葉に、騎士も剣を引きつつ、なんともいえない表情を返す。

「……まあ、まだ殿下も若いからな。しかし、あそこまでとは……」

殿下、ご乱心。

はたしてこの国がこれからどうなっていくのか、不安に襲われる騎士と暗殺者だった。

f i n

4. 民間資格の魔法使い

小さいころ、約束したの。

きっと、きっと迎えに来るって。

「りーふあ、まってね。きっとつよくなって、むかえにくるから」
遠く離れた処に引っ越していく彼を、見送るしかなかったあの頃。
いつかきっと、また会えるって。むかえに来てくれるって、信じてた。

——けれど。

「……まっていられなかったの、来ちゃいましたっ」

てへ、と笑いながら首をかしげて見せれば、彼は茫然と、ずれたメガネを元に戻して。

「ど、どちらさまですか？」

どうやら、10年もたったがゆえに、彼は私のことを忘れたみたいです。

「ひ、ひどい……っ、約束を忘れるなんてっ。むかえに来てくれるっていったのに！ 強い魔法使いになって、そしてむかえにきてくれるって！ 王都で頑張って宮廷魔術師してるってきいたから、私も魔法勉強しながらまっていたのに！ なかなか来てくれないから、ここまでいたのに！ ひどいいいいい」

「え、ええええ？ ええと、ちいさいころ？ え、あ、もしかして、リーファですか？ となりに住んでいた、いじめっ子の」

「え？」

「え？」

「い、いじめてないよ？ 酷い！」

「いやだって、ほら、嫌がるのに虫を押し付けたり、嫌いだっていつてるのにココルの実を食べさせたりしたじゃないですか」

「え、泣いて喜んでたんじゃ……？」

「そんなわけないでしょう！」

「がーん、ショック……」

「いや、どうしてそこでショック受けられるのかがわかりませんが……まあ、お久しぶりです。綺麗になりましたねえ」

「う、うわあ、王都にいったあなたってば、女たらしになったの？ なったの？」

「ちょ、社交辞令をそういう風にとられても」

「社交辞令って！！ 最低っ」

「ああああ、とりあえず、落ち着きましょう。ここまではどうやって？ 遠かったでしょうに」

不思議そうな彼に、胸を張って答えますとも。

「魔法の勉強をして、資格をとったの。で、さっそく王都まで飛んでみました☆」

きやるん☆と、首から下げていた資格証を見せれば、驚いたように彼は瞬いて、それから食い入るように資格証を見始めます。いやん、胸元を凝視だわ。

「転移魔法ですか……?! しかもその資格証、国の発行する魔術師資格とは違うようですね。なに、『地方連合協議会認定魔術師』？ なんです、これ、地方団体ですか？」

ぷるぷると首を振ります。

「なんか、民間の有志の方々が立ち上げた団体でー、なんと一日5分の練習で魔法が使えちゃう！ っていう、通信教育だよー。遠見の水晶で先生のチェックもばっちり！ これで私も魔法使いになれましたー」

「……え。なんですか、それ。人が魔法学園に必死で勉強して合格し、さらに学校で鍛えられ、やっこの思いで宮廷魔術師になって、そこまで来て転移魔法が使えるようになったというのに」

「え。1か月くらいで使えるようになったよ、この講座だと」

がつくりと項垂れる彼のそばによって、肩をぽんぽん。

「まあまあ。とりあえず、今夜とめてね？」

はっと振り返った彼に、にっこり。

せつかく、資格まで取って会いにきたんだもの。

もう逃がさないんだからっ。

彼の運命を知る者は、誰もいない。

余談。

かの民間資格、実は立ち上げたも現在講師をしているのも、実力はあれども人に仕えるのメンドイとばかりに引きこもったり自由に生きてたりした超優秀な魔術師たちが、遊び半分で立ち上げたものだったとさ。

f i n

5. 召使いは時給制

「それでは主さま、今日はここで失礼いたします」

就業時間を終えて、ふわりとお仕着せのメイド服のスカートを揺らしながら礼をする。

深く腰を折りながらも、バランスは崩さない。これって匠の技だね。

ゆっくりとそのまま体を元に戻せば、部屋の中、中央に置かれたカウチにしどけなく腰かけた、風呂上りらしき艶やかな濡れ髪の主様。先ほど届けたワインを片手に、じっとこちらをご覧になっておられます。

あらやだ、色気がただもれでしてよ？

「もう帰るのか。どうだ、一杯飲んでいらないか」

まあ素敵なご提案。主様が飲まれるワイン、とてもいいものが多いですよ。こちらに来てから、私ったらアルコールに強くなったみたいで。おいしいお酒をおいしく飲めるようになったのよね。じゅるり、と内心はよだれぬぐいっつも、必殺メイドの微笑み！

「とんでもないことでございます。一介の侍女風情がそのような。どうかお許しくださいませ」

そそと告げてみたならば、どこかまずいものでも召し上がったようなお顔の主様。まあ、失礼な。

「今更何を言う。ならばなんだ、仕事でなければいいのか？」

「いえ、お断りいたします。仕事としてでしたら、お付き合いさせていただきますけれど」

「……どっちだ。まあいい、座れ」

「失礼いたします」

身のこなしは丁寧に。ゆつくりと邪魔にならないように、カウチのそばへ。

ぽんぽん、って、そこお隣ではありませんか？ 座れと？ そこに座れと。

にやにやしないでくださいな、主様。エロおやじくさいです。いいませんけど。

しょうがないので腰をおろし。勧められるままに一杯二杯。あらおいしい。

窓の外は綺麗な月夜。これはいい月見ワイン。なんかゴロが悪いですね。

静かにかけられる声に、静かに応えして。程よく飲み終わったところで、そろそろお開き。

「しかし……かなり飲んだだろうに、崩れないな、お前」

どこか悔しそうな主様。そこそお酒がまわったのか、色づく頬に濡れた唇、あら、目まで潤んで。これはまた、美形だけに目の保養ですね。

「ええ、それが取柄でございます。では、今日はこれにて」

礼を取って、からのデキャンタとグラスを載せたワゴンと共に、退室します。

あ、そうそう、忘れるところでした。
出口のところどころ、振り返って。

「主様、本日、6時間の残業となります。夜間でもありますので割増しで、請求させていただきますので、よろしくお願いいたしますね。それでは」

はじけるような笑顔でにっこりと。そう告げると、今度こそ、静かに礼をしながら部屋を後にしたのでした。

ふっふっふ、お給料、時給制にしていたよかったー。

f i n

1. 恋愛ごっこなら余所でやりなさい

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

——それなのに。

「恋愛ごっこなら余所でやりなさい」

深いため息と共に、じっとこちらを見つめる目は、呆れたような色で。

仕事の手を止めさせてしまった私を、どこか非難しているようで。

「……だって」

「でももだってもありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合ってる暇はありません」

さっさと帰りなさい、と、そう短く告げられて。

そのままパソコンへと再び視線を落とす彼。

「あ……の……」

恐る恐るかけた声すら、もう届かないほど集中していて。

それ以上声をかけることなんか、できなくて。

しばらく、じっと見つめていたけれど、私のほうを見てくれること
なんか、なくて。

悲しくて。痛くて。つらくて。

私は、そっと、部屋を後にした。

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

ただ、彼しかいなかった。

幼い恋。小さなころに刷り込まれた、あこがれのお兄ちゃんは、今
や作家先生。

隣同士、幼馴染。年の差はいかんともしがたいけれど、隣のおばさ
んがかわいがってくれたから、彼の仕事場の家事のお手伝いをする、
と、高校に上がってから許可をもらった。

本人が知らなかったなんて。それこそ、私が知らなかった。

——そして。

いつものように、甘えた私を。

仕事中の彼は、取り合ってくれなくて。なんだかさみしくて悔しく

て。仕事から自分に視線を向けてほしくて、つい、言葉がこぼれた。
好きって。

いうつもり、なかったのに。
言ったって駄目だって、わかってたはずなのに。

返された言葉は、冷たくて。どこまでも、冷たくて。

気が付けば、ほろほろ、涙がこぼれた。

ずっと懂れていた。

それが本当の恋かどうかなんて、どうでもよかった。

恋愛ごっこ、だなんて。

——この思いが、錯覚かどうか、なんて。

彼にだって、断言される筋合い、ないのに。
遊びだなんて。ごっこだなんて。そこまで言われる筋合いなんて、
ないのに。

夕暮れの街は、紅に染まる。

じっと、空を睨み付ける。悔しい。悔しい。悔しい。——悲しい。

長く伸びる影を眺めながら、ひとり、静かに泣いた。

2. 子どもはもう寝る時間です

帰りたくなかった。

家にまっすぐ、帰りたくなかった。

だって、隣は彼の家。お兄ちゃんの家。

仕事場にこもることの多い彼が、いつもいるわけじゃないけれど。なんだか、家に帰りたくなかった。

放課後。

昨日まではクラスメイトと、あちこちに出かけたり、友達の家にお泊り会したりして。

高校までずっと一緒だった友人たちは、その親とも仲良しだったりするから、結構気軽に家にちゃんと連絡さえすればお泊り可だったり、連絡入ればある程度遅くまでオッケー、だったりして。

夜遊び、ってほどじゃないけれど、いつもより帰りが遅くなった。

お母さんは心配してはいたけれど、お兄ちゃんのところから帰ってから変だ、ってわかってたみたいで、何も聞かなくてくれた。お父さんにもなんとかごまかしてくれてるみたいで。正直、知られてるって怖さはあったけど、でも、ありがたかった。

さすがに今日は、友達たちも用事があるようで、ひとりぼっち。

今までなら、泊まらないまでも、友達とワイワイ過ごすことで気持ち紛れるし、そのまま帰宅すればその気持ちを継続できるし、で、なんとかのりきってきたけど。

ぽつん、と、一人になると、余計なことを考えてしまう。

嫌われた、という気持ちとか。お兄ちゃんがそんなことで嫌うはずない、という願望とか。年が離れた人を、なぜあんなに好きになったのかな、とか。――もう、会えないかな、とか。

会えないのか、会いたいのか、会いたくないのか。ぐるぐる回る気持ちには複雑で、なかなかこたえがでてこない。考えすぎて熱が出そう。ため息を漏らしながら、それでもまっすぐ帰る気持ちになれなくて、公園へ足を向けた。

小学生たちがきゅいきゅいと遊ぶ公園。昔、私もお兄ちゃんに遊んでもらったなあ、なんて、思い出す。

よほど小さい時から、私はお兄ちゃんが、彼が好きだったみたいで、足元がおぼつかない時から見つけると駆け寄るような子供だったらしい。おぼろげな記憶の中でも、まだ幼児の私が小学校高学年だか中学生だかのお兄ちゃんに駆け寄っては、遊んでもらおうとしている場面が浮かぶ。

……考えたら、すごい迷惑な子だったんだね、と。

今更ながらに気が付いて、恥ずかしくて身悶えしてしまう。

――でも。それでも、好きなんだよなあ。

なんで、と言われても困るけれど。

そんな風に迷惑な子供だったし、時々、めんどくさそうに困ったように、したけれど。

……遊んでくれたんだよな、子供と。ほっとけよー、なんていう同級生の言葉に、ごめんな、なんてこたえて。つまらなかったらうに幼児である私の相手を、しょうがないなあなんて顔で笑いながらしてくれて。

甘やかされてた。構ってもらってた。

——それが当然、と、思ってしまうようになるくらいに。

ため息が漏れる。あーあ。自業自得とはいえ、つらいなあ。もう少し、もう少し、大人になってから、いうつもりだったのに。好きです、って。だから頑張ってここまで立派になりました、って。あーあ。

夕暮れの公園は、日が落ちて、子供の数も減っていく。少し肌寒い気がしてぷるり、と、体を震わせたら。

近くで、呆れたようなため息が聞こえた。

ばっ、とそちらを見れば、彼の姿。え。なんで？ どうして？ と軽くベンチでプチパニックを起こしていると、少しばかり呆れたような声で、彼が言う。

「何をしてるんですか。バカ娘。遅くまでこんなところで。夜遊びのつもりですか」

「え……なんで？」

「なんで、も、ないでしょう。連絡してないんじゃないですか？いつもの時間に連絡がないのに帰ってこない、と、おばさん心配してましたよ。まったく……どこにいるのかとおもったら」

言われてみれば、今日はそこまで遅くなるつもりはなかったの、連絡はしてなかった。あわてて携帯を取り出して時間を確認。うわ、19時過ぎてる。まだ19時、ともいえるけど、私にしてみれば連

絡なしで帰らない時間ではない。

さらに、着信が複数。確認すれば母と……そして、彼からの、着信。視線を挙げれば、ふう、と、深くため息をついた彼。よく見れば少し汗ばんでるような気がする。――探してくれたの？ 私のこと、うっとおしかったんじゃないの？ それでも、探してくれたんだ。

「ご、めんなさ……」

「全くです。この公園、遅くなると変質者出るって知ってるでしょう。さあ、帰りますよ」

ぐい、と腕をつかまれて、立ち上がられる。ぐいぐい。引っ張られるように公園を出る。強い力。でも、転ばないように気を付けてくれる。昔からこうだった。強くて強引なようで、優しい。

――優しくされたら、諦めきれないよ。

目に涙がたまっていく。何かの拍子にこぼれそうになりながら、家の前について。

「まったく。文筆家なんですからね、運動なんてできないもやしなんですか……ら……」

ぼやきながら振り返った彼が、言葉に詰まる。

ああ、涙。隠せなかった。

ぽろり、と、一滴。ほほを伝ってこぼれていって。

沈黙。何も言えなくて。ただ二人で立ち尽くして。

どうしよう、と、思っていたら、視界に指が見えた。彼の手。少しごつごつして、ペンだこのある手。それが、ずっと私のほうに伸びてきて。こぼれた涙を救うように、そつとほほと目じりをなぞるように。

触れる、熱。

驚いて目を見張れば、はっ、と我に返ったように彼の手が戻される。

なに。いったいなに？

「っ。子どもはもう寝る時間です。さっさと帰りなさい」

そういうと、軽く私の背を押して、家のほうに進ませる。

え、どうということ？ そのままふらふらと玄関の前まで進んで。扉に手をかけたところで、振り返ったら。

もう、彼はいなくて。

混乱。困惑。パニック。

——20時じゃ、さすがに、寝るにも早い気がするよ、お兄ちゃん。

私は、ちょうど玄関の物音にきづいて出てきた母に声をかけられるまで、そこに立ち尽くしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356z/>

Training Box

2011年12月7日10時57分発行